

セミナー日記

一月一日(土) 人々が新年を祝っている元旦の正后過ぎ、越冬セミナーに参加する人々が次々に「旅路の里」に集って来た。この度の参加者は男子七名・女子五名・計十二名で、中に米国メソジスト合同教会から日本に派遣されていた韓国系米人李宜協さんも加わっていた。日本語は不自由でも、それにまさる積極性で諸行事に参加し、却って日本人青年のよい模範であった。経済的に恵まれていない日本で、路上で凍死する人のいる現実を、改めて日本の問題を読みとろうとしていた。

午後三時から金井愛明師の司式で開会礼拝が始まる。今年の越冬セミナーの特徴は、釜ヶ崎の労働問題を中心課題としたこと、そこで従来の教えるものと教えられるものといった立場を越えて、釜ヶ崎に関わっているものも、セミナーに参加しているものも共に学ぶ態度が大切であることを強調された。そこで田中正造とシモーヌ・ヴェイユの思想にふれて全員を祈りに導かれたのであった。特に天

才と云われたシモーヌ・ヴェイユが、労働問題を通して神に出合って行く。労働者が人間としての誇りを奪われて行く。その厳しさを神はどのようなまなこでみつめて居られるのか。労働を終えて、農夫哲学者と云われるテイボンとベンチに腰かけて、主の祈りを唱えた時、神の存在を深く感じたのであった。労働は祈りに近いものである。言葉に出さずとも仕事に集中することによって、神への思いを高めることができる。その点で近代のキリスト教は、精神性を強調するあまり、物自体の持つ価値を見失うことになってしまったのではないか。労働に於ける靈性の発見こそ現代の我々にとって大切なことである。そして、キリスト自ら教えて下さった「主の祈り」の中にその全てが含まれているのである。

開会礼拝の後、薄田神父より今度のセミナーの目的と特徴について説明があり、日課、プログラムについての若干のオリエンテーションがあって、五時、協友会の人々と共に会

食した。またその時に自己紹介が行われた。

七時から小柳伸顕師によって釜ヶ崎の労働の最初の発題がなされる。今年のセミナーの特徴は只夜間パトロールに参加するということではなく、「医療または病氣」の背後にある「労働」を問題にすることである。そこで先づ「九三」という数字を取り上げ、それにこだわってみたい。「九三」とは一九八一年十月十六日、北海道夕張新鉱で起きた鉱内爆発による犠牲者の数である。そしてその中の三五名は下請労働者であるが、爆発当時、炭鉱責任者は、犠牲者の数を六〇人として、下請労働者の犠牲を無視していた。このことに私達はもっとこだわってよいだろう。つまり、近代設備を誇る炭鉱労働も、最先端の危険な作業は下請労働者にまかされていて、しかも犠牲者がでもそれが無視されて行く、このことは、別に炭鉱に限ったことではない。釜ヶ崎の労働者の大半が働いている建築、土木工事の現場でもこのような考え方は生きている。差別といえればよいのであろう。しかも賃金の方も本来の単価は一万三〇〇〇円である筈なのに、もらう時には六五〇〇円から七〇〇〇円に目盛りしている。あきらかに中間搾取である。このことは労働基準法からも職安

法からも禁じられているのに、釜ヶ崎では堂々とまかり通っている。しかももっと恐ろしいことは、「行政改革」の名のもとに、労働者派遣事業の公認の立法化が行われようとしている。しかしこれはあきらかに手配師を公認するということなのである。

合理化や法律の改正で、いつも弱い立場のものが泣かされて来た歴史を忘れないようにして、我々は自分達が労働問題をどのように捕えなければならぬかをしっかりみつめて行かなければならない。

午後九時からは、半数がオリエンテーションを受けた後、釜ヶ崎越冬実行委員会と共に夜間医療パトロールに出発。残りの半数はスライドをみながら、更に釜ヶ崎の問題を自分の問題としてみつめて行った。

一月二日(日) 日曜日であるから、西成教会(日本キリスト教団)、釜ヶ崎伝道所(ルーテル教会)、ふるさとの家(カトリック教会)にそれぞれ分れて、礼拝に参加する。多くのものはその後の自由時間を利用して、三角公園のもちつき大会やその他の組合の活動に参加した。午後は平井正治さんの発題で「原発と釜ヶ崎」の關係について考えた。

日本の日雇労働者の歴史は古く、江戸時代

から、ヤクザとの關係で結ばれて来たものであった。ところが太平洋戦争が終結した時、占領軍は日本の労働政策について、民主化を主張し、労働組合を奨励したのであった。この裏には大企業解体という目的が含まれていた。この民主化政策によってもっともヤクザ支配のひどかった港湾労働者も全部登録して組織化されることになった。ところが朝鮮戦争が始まった時、民主化政策では軍需荷役に追いつかないというので、占領軍そのものが、港に関しては手配師を復活させ、ヤクザが勢いづいて再び港を支配するようになったのであった。さて経済復興期に入って来て、オリピックだとか、万博だとかで海外との交流が増えて来た。その時、港で働く日雇労働者がポロポロの服を着て、ヤクザに青竹でたたかれながら働いているのでは具合が悪いというので、日雇労働者を職安に登録して、手配師を通じないで職安から働きに行くという港湾労働者法が生まれた。ところがその頃、日本のエネルギー政策が起って石炭から石油に代って来た。そこで炭鉱で働いていた人々は失業して、どんどん山谷、釜ヶ崎に入ってきた。そしていつのまにか、また手配師の幅をきかせる世の中がやって来た。更に今度は

石油が足らなくなり、原子力発電の時代がやって来る。他方で産業の合理化が進み、港湾労働もコンテナなど機械化されて港湾労働者は失業する。そこで新たに必要とされて来た原子力発電の危険な仕事に日雇労働者がかりたてられて行く。以上が大きくみた戦後の日雇労働者の仕事の流れなのであるが、政府の政策が変わる度に犠牲を強いられて来たのが弱い立場にある労働者なのであった。夕食後は、釜ヶ崎日雇労働組合の人々と共に体験交流の場を持った。特に越冬パトロールが始まって一週間の体験を通して、今年の特徴がどこにあるのかを考えた。第一に言えることは行革の影響が如実に釜ヶ崎の冬に表われている。青カン者の数は年末には四〇〇名を越したが、これはこの数年間に経験したことのない数で異常ということが出来る。しかも臨時宿泊所は空室があるので、種々の口実で労働者を受け入れようとしていない。第二に病人が多い。日雇労働―病氣―入院―退院―失業―青カン―病院―退院―失業―青カンなどを繰り返している内に身体がどんどん衰弱して行路病人になり、行路病死を目前にみるようになってしまう。そこで釜ヶ崎は労働者の街であるから、労働者は労働によってのみ人

として生きて行くことができる。従って野宿する人に蒲団を提供すればよいということではなく、むしろ、青カンする人がどうすれば再び労働に従事できるか。これが今の課題であることが強調された。病弱者にもできる軽作業を保証して欲しいとの訴えにも、行政の耳は仲々遠い。

九時より昨夜パトロールに出なかった半数がパトロールに出発、残りの人々はスライドをみて、また自分達の体験について語りあった。

一月三日(月) 朝からまとめのレポート書き、十時から討論会に入る。各自アンケート用紙を渡され、それにもとづいての話し合いであった。

- 一、セミナーに参加してよかった点。
- 二、プログラムに対する希望。
- 三、帰ったら友人に釜ヶ崎の何を伝えたいと思うか、一つだけ記すこと。

四、その他なんでも。

参加者が共通して、今回のセミナーでよかった点としてあげているのは、労働者自身から話を聞くことができたということであった。特に「平井さんの原発の話は、プログラムの中で一番よかったと思う」と記している人もいた。更に自由時間に参加者の目にうつった

組合の人々の姿を印象深く思った人も多い。福祉施設自彊館前で、入所を拒否された労働者の入所を要求して闘う姿に打たれ、「組合の人々の全存在を賭けた生き方にふれたのは、セミナーに参加してもっとも大きな感激であった」と記している。

プログラムに対する希望は、やはりもう少し、越冬闘争に直接参加すべきだということであった。「パトロールだけでは充分ではない。組合の活動に直接参加し、闘い、苦しみ、討論し、共に悩むことが必要」「越冬の期間中、特に正月の三日間は、越冬の活動に存分に参加した方がよかったと思う」。もう一つの希望は、話し合いの時間がほしかったということであり、これにはただ討論の時間だけでなく、セミナーそのものの時間を一週間位にして、一つ一つの活動にじっくりと参加したいという要望も加わっていた。

友人に伝える言葉としては、「とにかく行ってごらん」「一人の人間が、冬空の下で(野たれ死に)している現実を話す」「福祉行政の網から落ちてきている人々を、組合の人は生命をかけて仲間として生きている。私達はせめて、炊き出しのお米や衣類を送る援助ができる」。一般的に言えることは、みんな

の印象に残り、是非伝えたいと思ったことは、予想以上の現実の厳しさ、それに対する行政の冷たさ、組合員の真剣な生きざまである。最後に参加者同志の交流がもっとほしかったとの希望も多かった。

討論会が終わって最後の会食をつきぬいの内になごやかにすませ、二時よりふるさとの家のルカス神父(フランシスコ会)の司式のもとに閉会礼拝が行われた。三日間の内を今ゆっくり解きほぐすようにと、五体を用いての祈りであった。身体の一部一部をしっかりと意識することによって、却って全身の緊張をほぐして行く。そして改めてみことばを味って受けた恵みを感じ、その恵みにどのように答えようかと決心していく。

世間では正月三日間は、浮き浮きと過すのであるが、敢えてその三日間を釜ヶ崎で過した若人たちは、それが今年一年間の過し方どのような意味を持つのであろう。それぞれの思いを残しながら、閉会礼拝にあづかり、三時、家路に向ったのであった。

1982年度 第8回

釜ヶ崎越冬セミナーだより

去る12月16日の越冬セミナー委員会がプログラムが下記の通りきましたので、お知らせいたします。(プログラムについては、多少の変更もありえます。)

○テーマ 釜ヶ崎の労働

○日時 1983年1月1日(土) 午後2時(集合、受付)～1月3日(月) 午後3時(解散)

○会場 「旅路の里」大阪市西成区萩の茶屋2-8-9 Tel. 06(647)3946

○プログラム

	午前	午後(1)	午後(2)	夜間
1/1 (土)		2:00 受付 3:00 開会礼拝(金井) オリエンテーション(薄田) 5:00 会食	7:00 釜ヶ崎の労働① (9:00 釜ヶ崎の労働②) (発題: 小私印) - 日本経済と日雇労働 -	9:30 パトロールのため オリエンテーション 10:00 パトロール (トイバス) あるいは、日雇田
1/2 (日)	自由 (各自礼拝出席)	2:00 釜ヶ崎の労働② (発題: 平井) - 原案と釜ヶ崎 -	7:00 釜ヶ崎の労働③ (労働者との交流)	スライド 「一緒に生きていよ」 (*2つのグループに分れ ここで5分に分割して)
1/3 (月)	9:00 レポート書き 10:00～12:00 討論会	1:00 会食 2:00 閉会礼拝 (礼拝) 3:00 解散		

○感想文 帰宅されるまでに、3日間の感想、意見などを800字～1,000字程度にまとめていただきます。

○会費 1月1日当日の受付にてお払い下さい。
3,000円です。

万が一出席できなくなった場合は必ず
委員会宛、事前に連絡して下さい。

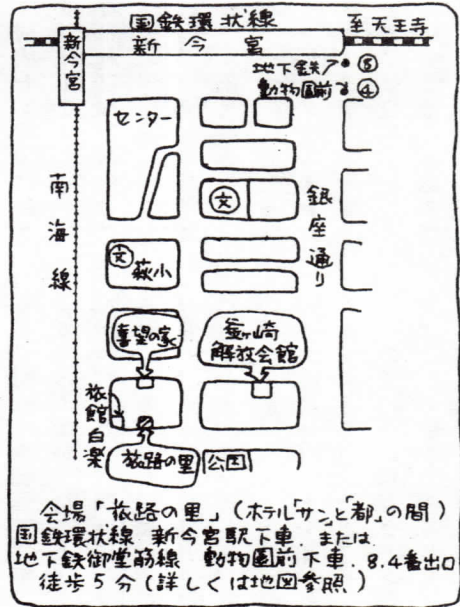
「旅路の里」 Tel. 647-3946

○食事 会食以外は、各自外で自由にとり
いただきます。

○持参品 洗面具、作業ができる服装、夜間のパ
トロールの寒さを防ぐことのできる服装
(オーバー、ジャンパー、靴、靴下等)
聖書、筆記具

○お問合せ 「旅路の里」 受付

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会(土井まで)
Tel. 06(647)3946



感想・セミナーに参加して

かちかんがかわった

李 宣協

82年12月28日 釜ヶ崎の

労働いりょうセンタ前のふ

とん 中で一人が死んだ。

次のけいびでさんかし

た時 目の前 ねて いる

人々の中で ある一人が

あすの朝 死ぬかのせい

があるという つめたい

現実が こわかった。また

この現実を して いるの

に 何も できない自分の

よわさを かんがえながら

前も なんかい さいたし

つもんを また 自身にさい

た「なぜ」。というのは

まず なぜ こんな しょう

きよが おこって いるのか

と、もう一つはなぜ神

がこの現実を 私にみ

させて いるのかだ。

もちろん この 質問の

答は そんなに みつけやす

く ないけど 日本に きて

一番 日本社会の むじゅん

を はっきりと みさせて

くれた 現場は 釜ヶ崎だ。

ただ 私は 神のこえが 釜

みたいな 現場を通して 今

日本の クリスチャン また

は今の世界を しい して

いる かちかんを テスト

して いると思う。

釜に きて 釜日労働の 人

達と 話しながら 釜井先生

の せっきよを ききながら

釜井先生の 発題を ききな

がら 私が 今まで 労働の

かちかんが かわった。釜井

先生の いきざまという ことばが 人想にのこっている。だから ある面では 私が

労働者に なりたいほどだ。

(原文のまま)

もう一つのお正月

中村恵子

一九八三年一月一日、越冬

セミナーが始まった日である。

世間は正月、教会ではおごそ

かに元旦礼拝が守られる年の

始めに 何故セミナーは開か

れ、何故私は足をここ釜ヶ崎

へ運ばなければならなかった

のか。

私にとって、今回の越冬セ

ミナーは、お正月にあるとい

うことが、一つの大きな意味

を持つていた。クリスチャン

である私には、年の始めは、

着物を着て、気持ちを新たに、

教会で礼拝を守ることがあた

りまえであった。また、お正

月は誰もかれも、家で家族と

共に、ゆっくり過すことがあ

たりまえのことであると思っ

ていた。しかし……大学生と

して、関西の地にきて二年、

今までみえなかったこと知ら

なかったことが、次々にみせ

られ、知らされた。釜ヶ崎の

存在も、そんな中で知らされ

た一つであった。そして、私

の思う あたりまえのお正月

が釜ヶ崎にないことを知った。

青カン者 三〇〇数名。セン

ターの外にひかれたフトンの

数、そこで眠る労働者たち。

道ばたで、ダンボールにくる

まって眠る労働者。予備知識としてあったものの、現実を前にした時、さらに大きなショックを感じた。

今回、私にとって印象的であったのが、組合の人々の姿であった。仲間のために共に闘うその姿に、キリスト教でいう、隣人とは何であろうかと思つた。また、共感するとは……。私は学生であり、働く苦しみを味わつたことはい。そんな自分が、どこまで労働問題々を考え、釜ヶ崎の現実を共感できるであろうか。そんなことを考えながら、三日間のゼミナーは終わろうとしている。が、お正月が過ぎても、ゼミナーが終わって、越冬はつづく。私が暖かいフトンで眠っている時、釜ヶ崎の空の下では、何百という人が、生死にかわる青カン

をしている。いや、しなければならぬ状況にある。また、その仲間のために寝ずに警備する組合の人たちがいる。

私はこのゼミナーで見たこと、感じたことを、自分の生活の場で、どうかえしていくのか、そんな課題をもちながら、また、もっとたたかれない

忘れまい

厳寒の下、センター前でズラリとふとんを並べて寝ている労働者たち、それを見守る組合の人々の姿、その凄絶な光景を忘れまい。自分の部屋でふとんの中に寝ていても寒さにふるえることがあるのに、一人また一人と所どころにアオカンしている老いた労働者たち。その数およそ四〇〇余。その事実を忘れまい。

くてはいけないなと思ひながら、釜ヶ崎での三日間に暮るとじたいと思う。

スタッフの皆さん、ありがとうございました。もしかしら、大切なことを見落しているのではないかと感じながらも、今の私が感じることを大切にしていきたい。

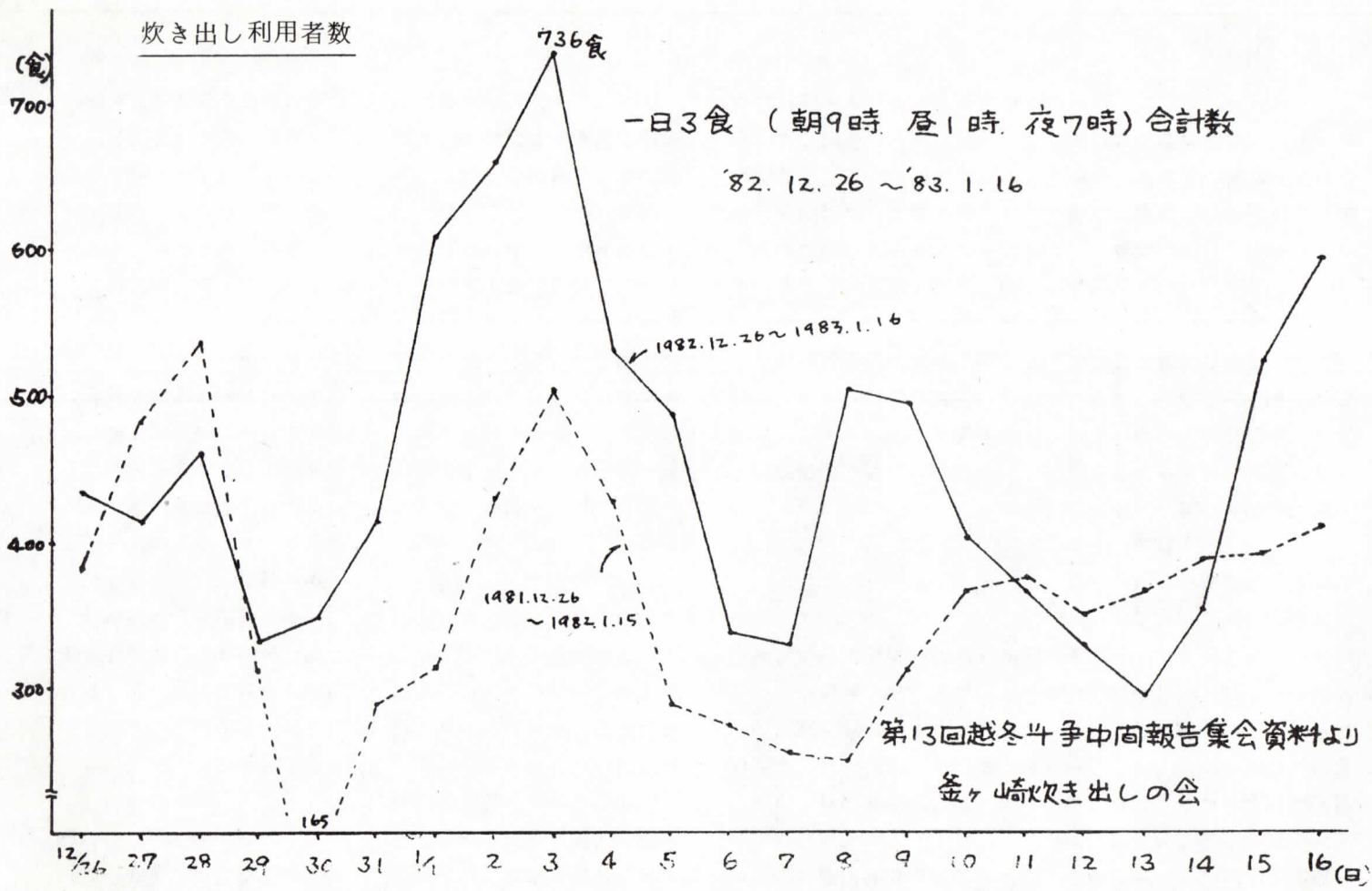
梅田修平

自彊館前で病んだ労働者たちを収容させるべく交渉する組合の人々の異様な風体、しかし彼達の中にあるあの透明な倫理感は、いったいどこからくるのか。行政は何故、老いたこれらのアオカンしている労働者たちを見殺しにしているのか。いや、自分は、いったい何をしてきたのか。そして何をしようとするのか。

釜ヶ崎では、まるで劇のセットのように、劇的な形で人間のむきだしの姿が渦をまいている。しかしこれは劇ではないのだ。むしろ自分が確保していると思つている寝床と食物の確かさを疑うべきだ。それらを失うまいとあるいは、失うはずはないと、心の底でひそかに思う自分のあさましさと、ひ弱さ。

共苦こそ愛であるならば、組合の人々は確かに愛に生きているのではないのか。だから僕も、組合の人々を正しいと思ひ自彊館の前で同じ怒りと悲しみをもてたのではないか。

「旅路の里」の朝のミサで、静かに味わつた透明な心の喜びを、これから僕は人々に伝えなければならぬ。ありがとう。

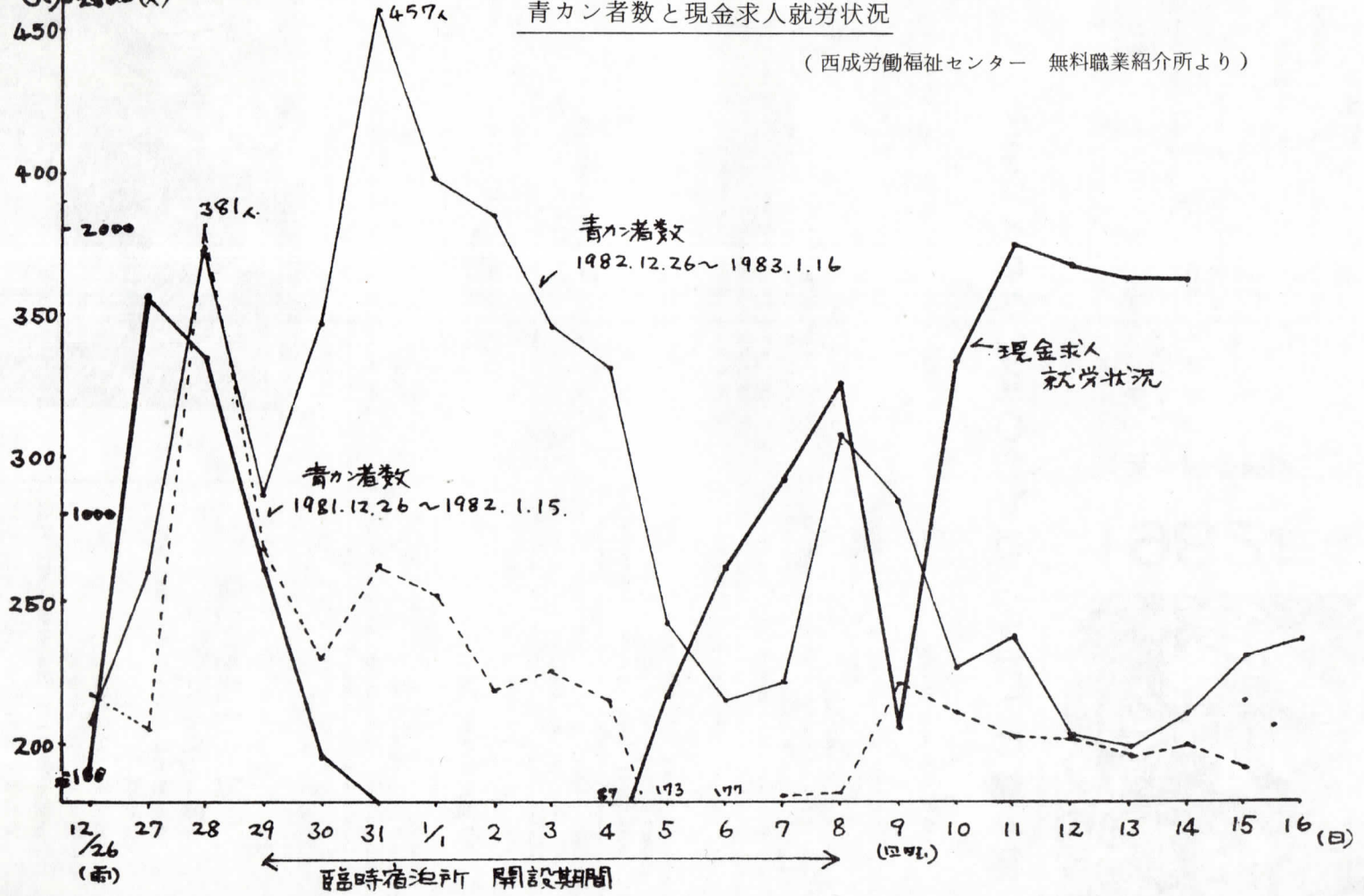


〔青カ者数〕〔現金求人就業状況〕

(人) 2000 (人)

青カ者数と現金求人就業状況

(西成労働福祉センター 無料職業紹介所より)





1982年冬

(釜ヶ崎通信第三号)

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

(釜ヶ崎協友会・関西キリスト教都市産業問題協議会)

代表 シスター 岡風呂

大阪市西成区秋之茶屋二一八一九

旅路の里気付

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

連絡と
カンパの

送り先 電話 大阪(〇六)六四七三九四六

郵便振替口座 大阪一 一五〇三八五

釜ヶ崎の「越冬」に八〇〇万円のカンパを!!

〇不況つづきの釜ヶ崎

今年の四月以降、釜ヶ崎は不況つづきで、一番仕事の落ち込みの激しかった五月、六月には、仕事にアブレた労働者は、近くの天王寺公園内にある茶臼山にテントを張り、グループで共同生活をしていたくらいでした。セントー内の寄せ場には、早朝にもかかわらず、求人車の乗用車が、三台という時もありました。今年は、オイルショック以来の不況だと言われています。その原因は、次のように考えられます。オイルショックによる不況をもち直すために、政府が公共投資を行なった結果、一時は、釜ヶ崎の仕事も建設業を中心に増えました。しかし、この公共投資は大巾な財政収支の悪化をうみ出し、一九七九年頃から公共事業予算の伸び率が〇%に押えられました。また、民間の住宅投資の不振、政府の「行政改革」や軍事費増大の政策は、今日のような不況の中で、その矛盾を特に顕著に釜ヶ崎にあらわしています。

それでも、今年の益すきから台風の影響などで徐々に仕事ができるようになりましたが、これも一時的なものにすぎません。今年に限らず、今後もこのような状態が続くと思われれます。

〇「就労申告書」廃止

不況のなか、より一層、労働者を困窮に陥れようとするのが「就労申告書」の一方的廃止です。

労働者が就労すると、日雇労働被保険者手帳(白手帳)に働いた証明として雇用保険印紙を貼るようになっていました。その印紙が二月で二八枚以上になると翌月から十三日十七日、

一九八二年度活動

- 一、労働者に仕事を
- 一、医療福祉相談室・越冬委員会事務所
- の開設
- 一、炊き出しでの支援
- 一、越冬セミナーの開催
- 一、年間を通しての活動を進める二人の
- 専任者への支援



アブレ手当(一日一級で四一〇〇円)が受けられるようになっていました。雇用主が雇用保険に加入している業者に就労した場合は、印紙を貼ってもらえますが、加入していない業者にについては、今まで印紙のかわりに「就労申告書」に業者の印を押すことによって印紙のかわりと認められてきました。

ところが、今年の三月末、「あいりん職業安定所」は、大阪府労働部雇用保険課の命令を受けて、一方的に、今年九月から「就労申告書」を打ち切ると通告してきました。

この「就労申告書」制度の始まりは、一九七〇年、万博の年に労働福祉センターがオープンした当時にさかのぼります。大阪府労働部雇用保険課は打ち切りについて次のように言っています。「当時、センターに求人にくる業者のほとんどが、雇用保険に加入していないで、就労しても印紙がなく、アブレ手当が受けられませんでした。そこで、全港湾建設支部西成分会の要望もあり、緊急避難措置として、「就労申告書」を認めたのです。一九七五年当時においても、「就労申告書」を利用する業者が七〇%にもはばり、廃止に踏み切ることができませんでした。しかし、現在では、「就労申告書」を利用する業者は、割と激減しています。

たとえ、割だとしても、そこで不利益を受ける労働者がいることは間違いありません。実際、不利益を受けている労働者がいる以上それを許すわけにはいきません。

この「就労申告書」廃止に反対し、釜ヶ崎日雇労働組合・争議団がセンターで署名運動をしたところ、五日間で、六〇〇余名の署名が集まりました。

大阪府庁に団交にも行きましたが、行政側は真摯に受け取めようとする姿勢は全くありません。

この背景には「行政改革」による日雇労働者の切り捨てがあ



りありとかがえす。このことを始めとして、今後毎日雇労働者の切り捨てが、ますます厳しくなっているのではなにか、と予測されます。

私たちは、今後、労働者が抱えている根本の問題は、労働問題であり、そのことを考えていく必要があるのではないかと話し合っています。

「このままでは、労働者があまりにもみじめちがいますか。年いって働けんようになって、アッコに何の報酬があるの」という一労働者の叫びを自らのものとして受けとめたいと思います。

○結核と入佐さんの取り組み

私たちは、冬に行旅病死者が増えるというので、「一人の死者も出さず」のスローガンの下、一九七七年より、「キリスト教釜ヶ崎越冬委員会」を組織し、越冬支援を今日まで続けてきました。四年間、冬期に活動するなかでみてきたことは、釜ヶ崎の問題は、冬に集中することはあっても、年間を通じて厳しい状況は変わらない、ということでした。そこで年間を通じての取り組みが始まったのです。

また、「青カン者」のなかに、結核患者が多い、ということがわかりました。一九七七年の越冬報告書を見ると、結核問題に取り組み、出発点が表示されています。

「結核は、かつての中国の解放軍に従軍したカナダ人医師、ベチューンが言ったように、『結核菌は社会問題である』ことを釜ヶ崎の結核は証明しています。急激に結核が減りつつある日本で、こと釜ヶ崎では増えるというより常識を越えた数値を示しています。これは、釜ヶ崎の労働者が貧しいこと、また、釜ヶ崎労働者には、現代の医学の手はとどいていない、ということなのです。

社会医療センターで、一日一〇人の病人が診療をうければ、そのうちの一人は、感染性の結核患者であることを、医療券発行活動が教えてくれます。

行政がこの問題を放置し続ける限り、釜ヶ崎の結核は少なくともどこか、ますます労働者の身体を蝕んでいくことは、わかりきったことです。

そこで、一九八〇年より、入佐明美さんが結核専門のケースワーカーとして働き始めました。入佐さんの活動は、三角公園や道路で出会う労働者と話すことから始まっています。そのなかで、一人の結核患者が完治することを目指して、今日まで歩みつけています。昨年、結核患者であるAさんとの出会いの中で、入佐さんはじめ私たちは、釜ヶ崎で結核は治るということを実験しました。

「どうしても入院生活が続かず、結核のため働けず、アオカンをして体力を消耗しつくしている人に、また、結核は治らない病気だ、と信じきっている人に、このAさんの症例を伝え、『新しい人間関係をつくりながら治していくこと』を知って欲しいと思っています。」(一九八一年、カンパ要請ヒラより)と入佐さん自身、語っています。

しかし、私たちに希望を与えてくれたAさんは、結核が完治したにもかかわらず、呼吸不全で亡くなってしまいました。全く信じられないことでした。私たちが気づかない所で、年間三百

人もの労働者が、行旅病死させられている現実を正に、眼の当たりにしました。大きな失望の中から、新たに、入佐さんは労働者自らが自立の道を歩むことを目指し、一人の結核患者の完治を求めて、労働者と出会っています。

今年、軽快退院してきた結核患者のためのアフターケアの場として「旅路の里」が発足しました。これは、カトリックイエズス会の薄田神父が中心となり運営しています。今後の働きが期待されます。

越冬支援の経過を振り返ってみると、毎年、試行錯誤を繰り返しつつ、矛盾を抱えつつ、それでも最低限、「一人の死者も出さず」のスローガンの下、活動を続ける必要性があったことをしみじみと考えさせられます。そして、年々、確かに積み重ねられていることを実感しています。それも、多くの方々の支援、カンパがあったことを考えないわけにはいきません。

今後、労働者が主体となり、力を結集した越冬を目指して活動が続けたいと願っています。そのために、お互い生きること自体を問いつつ関わりをもてることを期待しています。

今年もご支援よろしくお願いたします。

一九八二年十一月

一九八一年度カンパ総額

八、八一八、五九三円 個人 三三四件
団体 五八三件

釜ヶ崎日録

○5月28日

全国日雇労働組合協議会結成宣言集会(主催・全国寄せ場交流会)が三角公園において開かれました。これは、釜ヶ崎日雇労働組合・争議団(大阪)・笹島日雇労働組合(名古屋)・毎日日雇労働組合(横浜)・山谷争議団(東京)の四つの組織の団結・統一を宣言しています。

○7月25日・31日

第8回釜ヶ崎産業社会労働セミナーが開催されました。今年は「旅路の里」を会場にして開かれ、15名が参加しました。昼間は男子は日雇労働、女子は釜ヶ崎内にあるキリスト教施設で働き、夜は、講演や一日の経験を共有する場をもちました。不況の中、労働を経験できたことは貴重だと思われまます。

○8月12日・15日

第11回釜ヶ崎夏祭り(主催)第11回釜ヶ崎夏祭り実行委員会)

今年も例年のように三角公園にやぐらを立て、夏祭りを楽しみました。

12日 (前夜祭) 集会・映画「松本治一郎の闘い」

13日 スイカ割り・のど自慢

14日 すもも大会・つなひき

15日 寸劇・沖繩のうたとどり

舞台の隅には、三日を通じて祭壇がそなえられ、ろうそくと線香と野花がそえられていました。次々と焼香をする労働者の姿が眼に焼きつきました。

○9月21日

「旅路の里」で、阪奈病院から5名、阪和病院から1名の患者が集まり、患者交流会を行いました。この交流会から、今後、「旅路の里」で療養する人も生まれてくると思われます。



'82冬中間報告

(釜ヶ崎通信第4号)

キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

(釜ヶ崎協会・関西キリスト教都市産業問題協議会)

代表 シスター岡風呂

連絡と 旅路の早気付
大阪市西成区萩之茶屋二一八一九

カンパの キリスト教釜ヶ崎越冬委員会

送り先 電話 大阪(〇六)六四七―三九四六

郵便振替口座 大阪一―一五〇三八五

越冬活動も後半に入った釜ヶ崎から、中間報告をおとどけます。

今冬の厳しさ

越冬に入るにあたって、先におとどけしました支援要請文のなかで、「不況つづきの釜ヶ崎」の状況をお知らせしました。越冬活動の柱ともいべき夜間パトロールを昨年のクリスマスから始めましたが、私たちはその厳しさに驚ろかされました。私たちがパトロールをした地域内で、野宿(青カン)をせざるを得なかった人びとの数をあげてみます。

ハトロール開始日 昨冬 今冬
大晦日 元日 九六 四九五
月 五日 九 二

開始当初は昨冬に比べてそう変りはなかったものの、次第に増加し、大晦日には四五七名と今冬の最高数を記録しました。いくら暖冬の年末であつたとはいえ、これだけ多くの人びとが寒空の下で元日を迎えねばならないのが釜ヶ崎の実状なのです。年間を通じて「炊き出し」が行われていますが、82年12月1日から83年1月2日の間に、日平均で食が求められました。秋に、台風の後始末などで少し仕事があつたときは、「炊き出し」を受ける人の数も減少してしまいましたが、しかしそれも、時のことでしかありませんでした。景気の底冷えは厳しく、景気の都合で仕事が与えられなくなり取り上げられたりすること探しても仕事がないのですから、やむなく死と背中合わせの越冬をたたかわざるを得なくなりまます。

街の冷たさ

大阪市民生局は例年のように、大阪南港理立地に年末の臨時宿泊所を今年も開設しました。吹きさらしの理立地に建てられたフレハブは、有刺鉄線に囲まれて、けつして居心地のよい宿泊所ではないのですが、それでも毎年、千人近い人たちがそこを寒さをしのぎ、歳を越しました。しかし、今冬そこに宿泊を許可された人たちは、三八六名でした。昨冬は、九八三名です。から大市の減少です。「行革」による「福祉切り捨て」ということは聞いていたのですが、ここにその実態をみる思いをさせられました。

冷たいのは臨時宿泊所だけではありません。釜ヶ崎の街がすっかり冷たくなつてしまつてしまつて思われます。「整備」されていきます。公園は金網で入れなくなり、木の植えられていたわすか土はコンクリートで固められ、一夜の仮眠の場としてよく用いられたガードソはこれまたコンクリートが斜めにはられ「寝場所」が次第になくなつていきます。しばしば公園や道路がかたづけられ、布団などの生活用品が「ゴミ」として取り去られてしまつてます。街灯が明るくはなるほど、何ともいえない冷たさと静寂が釜ヶ崎にひろがる思いがします。

越冬の活動

この状況をなんとか暖かいものにしたと、越冬の活動が展開されてきました。2月6日から始められた夜間医療パトロールは、釜ヶ崎の労働者と私たちキリスト者のグループ及びその支援者によつて、1月・6日まで続けられてきました。地域内で野宿を強いられる人びとを、人づつ訪ね、緊急の場合は救急車を呼び病院に運びました。また社会医療センターの軒下をかりて布団を敷き、そこに多くの人びとを保護しました。そこに仮眠する人びとを、ねらう路上強盗を防ぐため、労働者たちは徹夜の警備を続けました。早朝から昼間にかけては、身体の弱っている人たちのために医療相談が行われ、多くの労働者が施設や病院に入ることができました。また、「炊き出し」のグループも、多くの「食えない」人びとを前にして奮闘を続けてきました。

さて、この越冬の活動は今、第2期を迎えています。さまざまな事情で、社会医療センター軒下での仮眠は、1月・6日で終りしました。1月・7日からは、私たちキリスト者グループが中心になつて、夜間パトロールを行っています。深夜、時から、現在もお百名近い野宿を強いられる人びとを訪ねます。約、時間半から、時間を要します。寄せていただいた毛布やオーバールを必要の人びとに手渡し、健康状態を問います。具合の悪い人は、翌日、ケースワーカーの入佐明美さんが相談に応じ、必要な処置をとります。

労働者たちは、身体の弱い労働者が軽作業につけるよう行政当局に交渉し、徐々に仕事場を更替しつつあります。これにも側面からの支援をしたいと考えています。

今後の活動のために支援を!

・深夜医療パトロール(1月末まで)
・医療・福祉相談
・活動の拠点としての事務所開設(現在はカトリックの「旅路の里」の、室を借用しています)
・人の専任者、入佐明美さん、上井美保子さんを支えるために

「炊き出し」のために

以上のために1月末までのパトロールのために毛布のカンパを今年も八百万円を募集中です。なお、作業衣、ジャンパー、長グツなどが求められています。

(一) 靴衣類はこれまで多く寄せられましたので現在は打ち切りしました。炊き出し用の米も有難いです。よろしくお願ひします。



あなたは今どこにいますか？

家の中にいる人は、この家は、誰がつくったのだろうか。ビルの中で働いている人は、このビルは、誰がつくったのだろうか。地下鉄電車に乗っている人は、この地下鉄は、誰が掘り、レールをひいたのだろうか。などと今、しばらくの間考えてみてくれませんか。

誰もがいやがるしんどい過酷な、そして危険の伴う仕事を、また一歩もちがえると、一貫の終りというきびしい仕事を、この日本の中で、誰が背負っているのでしょうか。また誰が、我々の生活の安定の根源をつくり出しているのでしょうか。

この釜ヶ崎は、労働者を中心に、十二月二十六日から一月十五日まで夜の十時から地域内の医療パトロールをしては、ケガ人、病人などに対する対策を行ってきました。多い日は、三百人の人々が吹きさらしの中でふとんにくるまり、さらに路上では百人の人々が野宿しているという現実です。さらにおどろくことには、日本国民の男子の死亡平均年齢が七十三歳というのに、釜ヶ崎の行路死亡平均年齢は四十五・六歳と推定されています。(西成福祉事務所一九八二年度調査)

なぜ我々の生活の安定の根源をつくり出すために体をはって生きてきた人たちが、冬になれば、仕事もなく吹きさらしの中で、ふとんにくるまり、また夜空の下で野宿しないとけないのでしょうか。憲法二十五条には「すべて国民は健康で文化的な……」と

かかれては、なぜこのような現実があるのでしょうか。これは、私の問題であり、あなたの問題ではないでしょうか。このような現実をつくり出しているのは、私であり、あなたではないでしょうか。

釜ヶ崎日録

一九八二年十一月
一九八三年一月

11月6日 一九八二年度越冬委員会が結成される。今年度は、長期的な展望をもって「労働」の問題に取り組むことを話し合う。

11月13日 「越冬支援交流会」を開く。

12月1日 炊き出しの会は、今日から2月末まで炊き出し一日三食を支給し、越冬闘争が始まった。

12月4日 冬期一時金(七千代)が支給された。

12月26日 第13回越冬闘争が始まった。(1月15日まで)。

越冬委は越冬実の活動を支援し、夜10時から夜間医療パトロールを行った。越冬実は、朝8時から、医療・労働相談を受けつけ、夜8時から布団敷き、パトロール後は朝まで警備(シノギ対策のため)を行ない続けた。

12月28日 通称。カワサキ。さんが、早朝医療センター前の布団の中で亡くなった。

12月29日 30日 大阪市が越年対策として南港と自彊館に臨時宿泊所を設置し、入所者の受け付けが始まった。

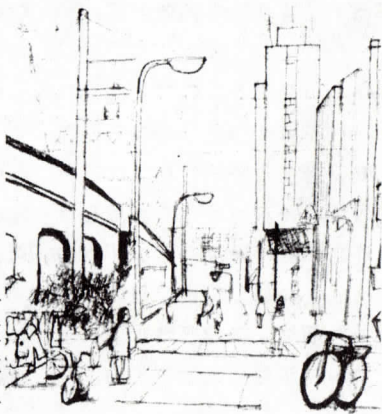
12月31日 臨泊があるにもかかわらず、青カン者の数は、これまで越冬闘争史上最高四五七人。

1月1日 3日 第八回越冬セミナーが開かれた。テーマ「釜ヶ崎の労働」参加者12名。

1月2日 越冬実主催、新春団結もちつき大会が、三角公園を会場に開かれた。

1月1日 3日 市更相が休みのため、臨泊に入りたい人が、直接自彊館に行き、要求した。

1月17日 キリスト教越冬委員会が中心となり、深夜1時よりパトロールを行なっている。2月末まで継続する。



カット 早坂博子

第八回越冬 セミナー参加者のレポートより

○ 大晦日の夜は家族が集って楽しく迎えるものだと思っていた私は、パトロールの中で淋しい大晦日に出会った。公園の中で、一升瓶を横において着のみ着のまま寝ている一人の労働者、何人かが横に座り込んで大声で呼んでみる。「頬をつねつても無反応な場合は、衰弱がひどいんだ。このまま放っていたら死んでしまう。」リヤカーに乗せられてセンターに運ばれた。彼は一人何を考えながら大晦日の夜を過ごしていたのだろうか。(S・F)

○ 知らなかつたということ許されるのでしょうか。その夜のパトロール中に見た光景は私を驚かせた。センター前に多くの布団が見える。こんなところに置くと冷くなるなど思いながらよく見ると、何とその布団の端から、頭、足がのぞいているではないか。(T・H)

○ 厳寒の下、センター前でズラリとふとんを並べて寝ている労働者たち、それを見守る組合の八々の姿、その凄絶な光景を忘れない。(S・U)

○ セミナーを通して、差別問題を口にしながら、自ら作り出す差別というものにいかに鈍感な己れであるかも教えられたように思う。(T・N)

○ 正月の三角公園で釜日労の人々が配る「もち」一つの味が、もう少しでも私に味わえるようになったら、労働者ともにも知れ、という一つのアイデンティティを得ることになるかも知れない。(J・I)

○ 一九八二年 12月28日、釜ヶ崎のいりようセンター前のふとんの中で、一人が、死んだ。次の、けいびで、さんか、した時日のまん前で、ねている。人々の中で、ある一人が、あすの朝、死ぬかのせいがあるという、つめたい現実がこわかった。(原文のまま) (S・L 在米韓国人)

○ 夜間パトロールで出会った労働者のこと。今仕事が少ないという10日も仕事ができず、その晩とまるころもなく、路上ですわつておられた。ポケットには友達からもらったという数百円だけ。医療センターに行く途中、「俺、これからどうしようかと考えていたんや」と何回も訴えられた。(S・K)

○ 今回、私にとって印象的であったのが、組合の人々の姿であった。仲間のために共に闘うその姿に、キリスト教でいう、隣人とは何であろうかと思つた。(K・N)

編集後記

梅雨前線の中に包まれた釜ヶ崎
晴れ間の見えるのを今か今かと待
ち望んでいる。

からっと晴れた大空の下でおも
いきり仕事が出来ないかなア。

エキューメニカルな集まりである
キリスト教釜ヶ崎越冬委員会の活
動は、自分たちの分野で働く仕事
を終え、夜に集まり、幾時間も会
合を重ね問題と取り組み、実ある
活動にと方向づける。

この熱に燃され、はげみとなり、
また新しい心でキリスト者として
神の愛を生きる出会いとなる。

(O)

この越冬報告書の編集後記を記
す日が来てはっとしている。思え
ば長い道程であった。特にキリス
ト教越冬委員会の発展的解散とい

う歴史的重大な時であったので責
任を痛感する日々であった。長い
梅雨が終わった途端の猛暑。もし
て八月十五日がやって来て日雇労
働者も益踊りをしている。みんな
故郷のことを思いながら踊ってい
る。その周囲には今年の物故者の
顔写真が飾られている。年間の行

路病死者約三〇〇名。盆が終われ
ば秋が来て、冬がかけ足でやって
くる。今年の越冬をどうするか。
新しい宿題を背負った協友会であ
るが、みんなが生きていてよかつ
たと言える日が一日も速くやって
くるためにも、冬に備えて次を頑
張らねばならぬ今日である。(S)

報告書の編集も手伝えず、結核
性の胸膜炎で入院してもうすぐ三
ヶ月。今まで見舞いはさせてもら
ってきたが、見舞われる側は初め
て。

毎日、毎日、天井を見つめなが
ら、いてもいなくてもどっちでも
いいような自分が情けなくなっ

くる。そんな中で、自分を慰めて
くれるのが見舞って下さる人々と
病気仲間の皆様。

精神的にも肉体的にも不健康な
状態の中で、一人一人の言葉を謙
虚に受け入れることだけはできそ
うだ。

生きている限り、暗闇の中を手
探りで歩んでゆくしかないような
不安を誰もが抱いて生きてゆくし
かないのだ、ということ教えら
れた。

*

(D)

「暴力団員が、生活保護を受け
ている」という生保見直しのキャ
ンペーンが行なわれている。誰も
が、「それはけしからん」と、こ
の見直しキャンペーンを支持する
のだが、そのねらいは生保を最も
必要とする末端の切り捨てなのだ。

ここ数年の釜ヶ崎の動きを見てい
ると、表面的にはキレイになって
いるが、その実態はマイナスに向
かって歩んでいる。「暴動」とい
う最大の犠牲を払って勝ち取られ

た「就労申告書」が廃止され、や
がて「日雇い健保」が廃止されよ
うとしている。「自分と釜ヶ崎は
違う」という格差意識を持つあな
たの足元に、すでに火はついてい
るのだ。このような「報告書」の
行間に自分の問題を見出ししてくれ
れば、うれしいのだが……(フン)

*

今回も表紙の絵やカットで協力
してくれた釜ヶ崎労働者の文化サ
ークル「創造広場」は、「釜ヶ崎
絵はがき」(五枚セット三〇〇円)
を出しました。その一枚と部分は
カット(p10・p4・p25)に使
用させていただきます。

絵はがきが必要な方は、左記の
郵便振替口座に申し込んで下さい。
大阪1・308209「工房・
創造広場」です。よろしく。

*

諸般の事情で報告書の遅れたこ
とを心からおわびいたします。

● 第13回釜ヶ崎越冬闘争支援報告書

「釜ヶ崎 1982年冬」

● 発行日 1982年10月1日

● 発行所 大阪市西成区萩ノ茶屋2-8-9
旅路の里気付 Tel 06-647-3946

● 編集 キリスト教釜ヶ崎越冬委員会
「釜ヶ崎1982年冬」編集委員会

● 印刷 (有) 木村桂文社

● 頒価 300円
